余話として

司馬遼太郎

文藝春秋

余話として

一九七五年十月三十日・第一刷

著　者・司馬遼太郎
発行者・樫原雅春
発行所・株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話　東京　二六五―一二一一
郵便番号　一〇二

印刷所・凸版印刷
製本所・大口製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© RYOTARO SHIBA 1975

Printed in Japan

目次

話のくずかご 7
アメリカの剣客 7
春日の大杉 16
千葉の灸 24
普仏戦争 32
村の心中 43
策士と暗号 54
ひとりね 65
有馬藤太のこと 74
日本人の名前 85
日本人の顔 93
浪人の旅 102
異風の服飾 110
武士と言葉 118

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

謀殺 127
どこの馬の骨 135
幻術 143
要らざる金六 151
ある会津人のこと 157
太平記とその影響 177
日本的権力について 195
霍去病の墓 211
あとがき 232

題字　原　理

装幀　横手由男

余話として

話のくずかご

アメリカの剣客——森寅雄の事歴

どういう名人でも、負けるときは負ける。

剣術というのは元来そういうものであり、絶対強というのはありえないとされている。そのときどきの体のぐあいや、相手の太刀筋（たちすじ）、あるいは相手やこちらの出方によって一瞬のうちに勝負が構成されるから、当然かもしれない。

が、百年に一度ぐらいは、絶対強にちかい名手が出る。名手や名人といっても剣術には記録性が明確でないが、その記録のあきらかなもののうち、ここ半世紀にかぎっていえば、昭和八年の「昭和天覧試合」における野間恒（ひさし）選手がその稀有（けう）の記録をつくっている。

勝負は三本で、うち二本をとればいいのだが、野間の記録をみると、東京府予選の段階から一本も打たれることなくすすみ、本試合で各府県代表と試合をすすめていっても、試合ぶりはすこ

しもゆるがない。最終試合で、香川県代表の逆二刀の使い手藤本薫とぶつかり、右の小刀を菜箸のように小きざみにつかう藤本の難剣にまどわされ、はじめて右胴を一本とられた。すぐさまうちかえして胴と面をとり、野間の全国優勝が決定したが、予選いらいの成績表をみていても、これほどの強さが現実にありうるかとおもわれるほどのみごとな記録である。

ついでながらこの野間恒は講談社の創始者野間清治のひとり息子で惜しいことにこの試合のあと数年のちに病没している。

どうも稀有の記録ですねえ、と十年ほど前、この野間恒を少年のころからよく知っている剣道家のR氏にいって、話題をさそいだそうとしたことがある。そうですね、とR氏はうなずいたが、冴えない。やがて、その野間恒よりももっと強いのがいたんですがね、わけがあって天覧試合には出場しておりません、といった。

「恒氏の従弟です」

名前ですか、野間寅雄というのです、とR氏は寅雄がいかに強かったかということを、老剣客にはめずらしく情熱的に語りはじめた。

寅雄には多少の事情がある。野間家に入籍してその姓を称しているが、養父清治翁とは血のつながりはない。本来は森姓であり、少年のころに野間家にひきとられ、母方を通じてのいとこである恒とともにそだてられた。野間家には、道場がある。そこで両人とも少年のころから剣術を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まなんだ。両人とも、剣術教師が舌をまくほどの天分があったのは、ひょっとすると、遺伝によるのかもしれない。

幕末、会津松平家の支藩の飯野藩の剣術指南役で、森要蔵という剣客がいた。要蔵は若いころ江戸に出、千葉周作の門に入り、やがて千葉の四天王のひとりにかぞえられるほどの名人になって、帰藩した。幕末人にはめずらしくひげをはやしており、あごから胸まで垂れている。その関羽ひげが白くなりはじめたころ、幕府が瓦解し、戊辰戦争がはじまった。

森要蔵は温和な人物で、時勢とあまりかかわりがない。が、会津藩の支藩の士だから、当然ながら対薩長抗争のうずのなかにまきこまれ、戊辰最大の悲劇である会津若松城の籠城戦に参加した。かれは支藩の兵をひきい、いよいよ籠城戦がはじまったときには城の郭外にある雷神山という山の守備隊長になった。

官軍の大将は、土州の板垣退助である。かれらは雷神山をかこみ、山麓から山上をめがけて大砲をうちこみ、さらに大規模な銃撃を加えたため、山肌を這いのぼる硝煙のために松の梢だけが点々とみえるほどだったという。この銃砲撃のために森要蔵はその隊員の大半をうしない、あとは、攻めのぼってくる官軍に対し、山上から駈けおとすような斬りこみをかけるしかなかった。その先頭には、つねに要蔵とその息子の寅雄（前記寅雄と同名）が立った。森寅雄はまだ十五、六歳の少年で、白い陣羽織に義経袴をはいている。父の要蔵が危なくなると、息子の寅雄がかけつけ、息子が包囲されると父親がかけつけてそのかこみをやぶり、その両人の運動を山麓から見あ

げるとまるで舞をみるようであった、と板垣退助がのちに語っている。板垣は銃撃をやめさせて父子をせめて銃弾による死からまぬがれさせようとした。が、ほどなく松の根方に関羽ひげと白い陣羽織が相かさなって斃れるのを見た。

その要蔵の娘が、恒と前記寅雄にとって母方の祖母になる。このため双方、森要蔵の血をひいていることになる。要蔵は安政年間、千葉周作が死んだあとしばらく神田お玉ケ池の千葉道場の世話をしていたことがあり、兼ねて桶町千葉といわれた分家の道場の面倒もみた。その分家道場の塾頭が坂本竜馬である。筆者は竜馬のことをしらべるとき、森要蔵のこともしらべてみた。森要蔵・寅雄の奮戦の光景は、山川健次郎も目撃したという。

山川健次郎というのは会津藩士の子で、最初白虎隊に参加していたが、年齢のつごうではずされた。維新後渡米し、のち東京帝国大学の四代目の総長になった人である。山川というひとは森要蔵父子のはなしをするたびに涙をこぼしたという。

野間道場で稽古をしているときは寅雄のほうが恒よりもわずかに強かった、とR氏はいう。いずれが強いにせよ、昭和天覧試合の当時、東京府においては両人が群をぬいて最強だったのである。まず、東京府予選に出なければならなかった。寅雄も出た。恒も寅雄もそれぞれ勝ちすすみ、ついに最終決定戦でかちあったが、意外にも寅雄が二本ともとられてやぶれ、失格した。剣に絶対強はないとはいえ、

「二本ともとられるとは、意外なことでした」
と、R氏はいう。勝ちを譲ったのだともいわれるが、事情はわからない。
その後、寅雄は野間家を出た。森姓にもどり、森寅雄になった。会津城外の雷神山で死んだ、かれら従兄弟にとっては大伯父にあたる寅雄少年と、同姓同名になった。もともと「雷神山の寅雄にあやかれ」ということでこの名を親がつけたらしい。森寅雄は、同時に日本からも脱出した。渡米した。
昭和九年のことである。森寅雄の年齢は、二十歳を二つ三つ出ている。

サンフランシスコに着いた。
アメリカにきたからといって、べつに就職のあてはない。最初、日本人が経営するオレンジ園で、農夫として働いた。
そのあと、転々とした。養蜂業者にもやとわれたらしい。その間、剣だけが身についた技術のこの天才にとって日本の剣術がわすれられなかったらしく、師匠も稽古相手もないまま、棒をけずって木刀をつくり、農園の片すみでそれを使い、ひそかにわざを工夫した。
白人の友人で、ダニエル・ソーンという親切な男と知りあったことが、かれの転機になった。
「アメリカにも、よく似たものがある。フェンシングというのだ」
と、ソーンは教えた。

教えただけでなく、ソーンはこの日本の剣術使いを、ロサンゼルスにあったフェンシング・クラブまでつれて行ってくれた。

見学するうち実際にやってみたくなり、かれにとってきわめて奇妙な形と機能をもったサーベルを借りて手にとってみた。振ってみると釣竿のようにしなう。その場で、クラブの幹部と試合をしてみた。五本勝負であった。ところが、負けた。

あっというまに五本ともとられるというみじめな負け方で、どこをどう突かれたかもわからない。

「あれは突くのだ。斬るのではない」

と、あとでソーンがやかましく教えたというから、寅雄は相手を叩っ斬ろうとしていたのかもしれない。ソーンは、貧乏な森寅雄のためにフェンシングの道具一式を買ってやった。

寅雄は、研究してみた。フェンシングというのは、剣術の突きでもなさそうであった。剣術の突きは、線から点に変化し、さらに線へもどるという変幻と流動のなかにあるが、フェンシングはそこは単純で、点(切尖)が点になるという運動のようであり、そう理解してしばらく我流で練習をしてみた。そのあとクラブへ乗りこみ、さきにかれを惨敗させた相手と立ちあい、こんどは、完膚なきまでに勝って、五本ともとった。

言いわすれたが、ダニエル・ソーンは養蜂業者である。寅雄はこの時期、その下ではたらいていた。野山で蜂を飼うかたわら、かれは手引書でフェンシングを勉強した。一年後にもう一度ロ

サンゼルスのクラブ（ＹＭＣＡの道場）へゆき、そのクラブでの最強の会員六人をえらんでもらい、それぞれ三本勝負で試合をした。こんどはかれも工夫をした。日本剣術の技術をかれなりにフェンシングに意訳し、剣術の受けのなかから相手を誘いこんで、突いた。この結果、一本も体にふれさせることなく六人ことごとくを降した。六人三本ずつだったから十八本を無傷でとるという、このクラブはじまって以来の記録をつくった。これが、かれをその道で有名にするもとになった。

この年であったか、その翌年だったか、筆者の手もとに正確な資料がないが、ロサンゼルスの選手権大会に出場して優勝し、ひきつづき全米大会に出て優勝した。渡米してわずか二年足らずのあいだのことである。

寅雄の寅をとって、タイガー・モリという名は、アメリカのフェンシング界で知らぬ者はなくなり、昭和十一年のベルリン・オリンピックにはアメリカのフェンシング・チームの非公式のコーチをたのまれるまでになった。

が、戦争になる。昭和十六年からは収容所ぐらしである。コロラド州の収容所に入れられた。この収容所生活は、かれにとって、東西二つの剣術についての思念をふかめることに役立った。

「私はアメリカへきて、術を離れた。術を離れてかえって道を知った」

と、晩年よくいっていたかれの開眼はこの時期からしい。

「フェンシングは、勝つだけの技術である。しかし剣道はおのれを鍛えるためのものである」

以下、かれの言葉。

「私には日本への憎しみがある。しかし憎しみが深まるほどに、自分の日本人であることが深まった」

「私はアメリカへきて、日本人として孤独になることにより、かえって武士道を知った。あのまま日本におれば武士道がどういうものであるかを知らなかったかもしれない」

戦後になった。戦前もそうだったが、戦後のかれの暮らしも、豊かではない。証券や保険のセールスをしたり、日本人会の事務をしたりして、生活の資を得た。

敗戦後、日本へ旅行をした。帰米して、かれは日本はすでになくなってしまった、ことをつくづくおもった。

日本がなくなった以上、かれは自分自身が日本になろうとした。それには剣の道をみがいてそれを残す以外にないとおもっただけでなく、かれはそれをアメリカでのこそうとした。

「アメリカ剣道連盟」

というものを興(おこ)し、その会長になった。かれの日系アメリカ人としての唯一の肩書はこれであった。日本剣道に専念しようとしたが、しかしアメリカのフェンシング界はかれをすてておかず、ローマ五輪のときはアメリカ・フェンシングチームの正式コーチをかれに委嘱(いしょく)し、律義なかれはそれを受け、選手団をひきいてローマへ渡った。

その後、剣道とフェンシングのための道場をロサンゼルスにつくり、養家の姓をとって、ノマ道場(フェンシング・スクール)と称した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com